

都市近郊農山村における 高度経済成長期という経験

住民の就業履歴および
平仙レース社内報『むつみ』の分析を通して

Experience of the High-Economic-Growth Period in Suburban Rural Villages : Through an Analysis of Residents' Employment Histories and the Hirasen Lace House Journal "Mutsumi"

湯澤規子

YUZAWA Noriko

はじめに

- ① 人間織物生産地域におけるレース生産への展開
 - ② 平仙レース工場の周辺農山村への拡大とその影響
 - ③ 住民の就業履歴からみた高度経済成長期における農山村の変化
- むすびにかえて

【論文要旨】

埼玉県入間地域は、幕末から明治・大正期にかけて全国でも有数の綿織物生産地域へと成長した地域の一つである。この人間織物生産地域における有力な機業家であった平岡仙太郎家は、大正末期にレース工業に着目し、入間市仏子に平仙レース工場を設立した。平仙レース工場はとりわけ第二次世界大戦後、その生産量では日本有数の工場となり、昭和35(1960)年以降は事業の拡大に伴って、より周辺の農山村にも分工場を設立し、昭和60(1985)年まで操業を続けた。当該地域の少なからざる人々は、平仙レース工場およびその分工場が立地したことにより、農山村生活から工場生活、企業生活への変化を経験した。

本稿では、このような都市近郊農山村における人々の暮らしと地域の変化を、住民の経験や就業履歴に対する聞き取り調査、当時の記録としての社内報『むつみ』を通して明らかにすることを目的とした。その結果は以下のようにまとめられる。

人間織物生産地域およびその近隣・周辺地域において、平仙レース工場そのものは住民たちの高度経済成長期の経験と深く結びついていた。その経験とはすなわち、第一に機械を扱う工場勤務という経験である。これは近隣農山村から入社した女子従業員にとっても、分工場が立地した周辺農山村の人々にとっても共通する経験であった。第二にあげられるのは、寮生活を通して得た、新しい価値観の経験、新しいモノの経験である。農山村の暮らしとは全く異なる寮生活の中で、教養講座などを通じて新しい時代を実感した経験や、ミシンや水洗トイレ、レースとウェディングドレスに触れた経験は、中学校を卒業後にレース工場に勤め始めた女子従業員の当時の記録や聞き取り調査の中でとりわけ鮮明であった。第三にあげられるのは、農林業から製造業への転換という経験である。これは特に、分工場が立地した周辺農山村に暮らす人々が経験したものであり、彼らの就業履歴は衰退する林業とそれを代替する製造業の登場という地域の産業構造の変化と密接に関わっていた。

本稿ではさらに、それらの経験の意味と地域の変化を地域の人々の視点から検討するため、分工場が立地した名栗村に焦点をあて、聞き取り調査によって住民の就業履歴を検討した。事例とした各氏はいずれもその就業履歴の中で平仙レース工場と関わり、林業、農業、養蚕業からレース製造業へとという地域全体の産業転換を具体的な就業の変化として経験した点で共通していた。しかし、彼らの経験を子細にみると、人々にとっての変化の諸相はそれほど単純ではなかった。農林業から工場勤務へと変化したことで、就業形態、賃金、生活サイクル、求められる技術が明確に変化した一方で、仕事に対する姿勢や意識、技術向上の努力などは異業種への転換の中にありながらも連続的に持ち続けられており、その連続性によって平仙レース工場が支えられていた。つまり、従来の地域や暮らしが新しい地域や暮らしへと変化する過程は、断絶性と連続性の両側面を含みつつ、その両者が相互に影響し合いながら進行するものであった。

【キーワード】 都市近郊農山村、高度経済成長期、就業履歴、林業、レース工業

はじめに

1. 問題の所在

埼玉県入間地域は、幕末から明治・大正期にかけて全国でも有数の綿織物生産地域へと成長した地域の一つである。この入間織物生産地域における有力な機業家であった平岡仙太郎家は大正末期にレース工業に着目し、入間市仏子に平仙レース工場を設立した。平仙レース工場はとりわけ第二次世界大戦後、その生産量では日本有数の工場となり、昭和35（1960）年以降は事業の拡大に伴って、より周辺の農山村にも分工場を設立し、昭和60（1985）年まで操業を続けた。

平仙レース工場は従業員を入間市およびその近隣農山村地域から確保し、分工場が設立されてからはより周辺の農山村地域から雇用した。当該地域の住民の視点でいえば、平仙レース工場は地域の主要な就業機会の一つであった。当時の記録、およびかつてこの工場で働いた経験を持つ人々に対する聞き取り調査の中では、農山村地域に暮らす人々にとって、工場における作業、従業員寮での生活、レースという製品そのものが、高度経済成長期における経験として鮮明に記憶されていることが語られた。例えば、近隣農山村から本社勤務の従業員として寮生活を始めた女性たちは、新しい生活スタイルや価値観、新しいモノとの出会いを経験し、分工場の従業員として働き始めた周辺農山村住民たちは林業から製造業への転換を経験した。つまり、当該地域の少なからざる人々は、平仙レース工場およびその分工場が立地したことにより、農山村生活から工場生活、企業生活への変化を経験することになった。

本稿では、このような都市近郊農山村における人々の暮らしと地域の変化を、住民の経験や就業履歴に対する聞き取り調査、当時の記録類を通して明らかにすることを目的とする。研究対象とする地域は東京都の西方に位置する埼玉県入間市、飯能市名栗（以下、名栗村）とする（図1）。都市近郊農山村を研究対象とするのは、人口構造や産業構造に大きな変化が生じた高度経済成長期⁽¹⁾において、一般的な農山漁村に比べて、より複雑な変化を経験したと理解されているからである。名栗村の基幹産業は、近代から現代を通して林業であったが、戦後の拡大造林の後、燃料革命や外国材の輸入によって林業が衰退すると、その後は各種工場が立地し、さらにその後は都心通勤者のベッドタウン化が進行した。林業が衰退した後に立地した工場の一つが前述の平仙レース工場の分工場であり、村民の中には同工場で働いた経験を有する者が少なくない。

つまり、当該地域では農村織物業からレース工業へ、林業からレース工業へという転換がみられた。このような変化の中で、地域の人々はどのように対応しながら暮らしてきたのであろうか。それを明らかにしようとする時、就業履歴は人々の経験を表す一つの指標となる。江波戸⁽²⁾（1976）は長野県岡谷市の一集落における住民の就業履歴を収集分析することを通して、養蚕業地域から精密機械工業地域への変貌を詳細に描いた。関戸（2000）は山村における住民の就業履歴を分析し、地域の構造的な変化に論及した。これら既往の研究が指摘しているように、人々の就業とその履歴は、地域やその産業構造の変化と密接に関わりながら展開するものである。

「それぞれの人の経験には必ず時代が反映している。一見してばらばらに見える人びとの経験は

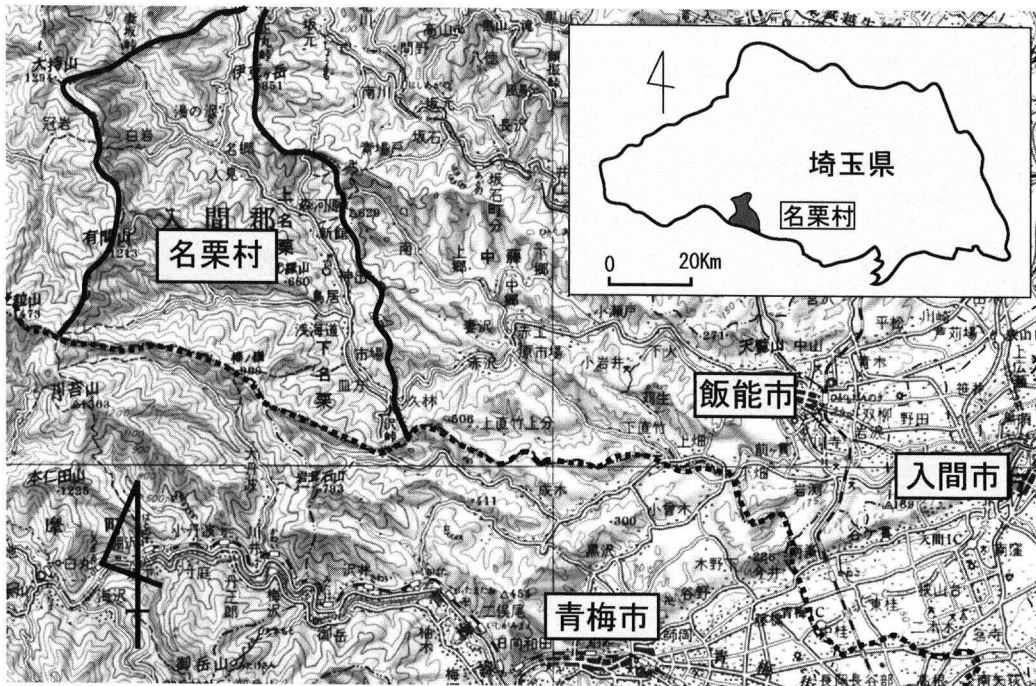


図1 研究対象地域

資料：国土地理院発行 20万分の1地形図「東京」(1998年発行)に加筆。

時代の影響を受け、時代の共通性を帯びている」と述べた大門ら（2003）の言葉を借りれば⁽³⁾、本稿では地域に暮らす人々の多様な経験の中に貫かれている共通性を見出し、時代や地域の特徴を描くことを試みる。名栗村に暮らす人々の経験の共通性を描くうえで重要であるのは、長く地域の基幹産業として位置付けられていた林業であることはいうまでもないが、それと合わせて前述した平仙レース工場との関わりにも留意したい。

2. 研究の視点と方法

本稿では、工場側の論理を視野に入れつつ、聞き取り調査を通して農山村住民の視点から工場と地域の関係、地域と暮らしの変化を明らかにするために、主に2つの方法を用いる。

第一の方法は、平仙レース工場社内報『むつみ』を史料として引用、分析することである。『むつみ』は昭和25（1950）年に創刊され、昭和43（1968）年まで、ほぼ毎年1冊ずつ刊行された⁽⁴⁾。公開を目的とした記録であることから、工場生活の実態そのものを把握する直接的な史料とは成り難いことに留意すべきであるが、内容や寄稿者の属性を加味して分析することで、史料としての活用が可能であると判断した。その内容は大別して①会社経営側からの寄稿、②社内各組織からの連絡事項および寄稿、③従業員からの寄稿に分けられ、特に③が多くを占めている。会社側の論理を考察する際には①、②に着目し、従業員の視点や日常を理解するためには③に着目することが有効である。③には日常的な工場の作業風景や暮らしの諸相、仕事に対する思いや考えなどが多く記述されているため、聞き取り調査の内容と合わせて検討することが可能である。

第二の方法は、聞き取り調査によって住民のライフヒストリーを収集し、その中でも特に就業履

歴に着目し、分析することである。⁽⁵⁾ 本稿では特に、名栗村において聞き取り調査を実施した。聞き取り調査の話者が『むつみ』に寄稿している場合には、その内容を合わせて検討することとする。

具体的な論文構成は次の通りである。まず、第1章で人間織物生産地域におけるレース生産の展開を素描する。ここでは特に、『むつみ』を通して第二次世界大戦後の工場と従業員の生活を近隣農山村との関わりを視野に入れて明らかにする。第2章では高度経済成長期における平仙レース工場の周辺農山村への拡大とその影響を、名栗村を事例に長期的な地域変化をふまえて検討する。工場の立地や地域の変化をさらに住民の視点で理解するために、第3章では名栗村においてレース工場に関わった人々のライフヒストリーと就業履歴を記述し、むすびにかえて、人々にとって高度経済成長期という経験が如何なるものであったのかを考察する。

①……………人間織物生産地域におけるレース生産への展開 —平仙レース工場の設立

1. 平岡仙太郎と平仙レース工場

平仙レース工場は大正末期にレース工業に着目した平岡仙太郎（明治27〈1894〉年生まれ）によってレース機械が輸入され、昭和4（1928）年に入間市に工場が設立されたことに始まる。平岡仙太郎はもともと人間織物産地における、銘仙、絹綿交織、綿織物の有力機業家の一人であった。同家は人間織物産地における力織機化過程において、大正10（1921）年に500台を導入、32万反余りの生産量を誇り、その規模は人間織物産地で第1位であった。⁽⁷⁾ 織物業からレース生産へ移行した後の平岡家の詳細は史料の制約から未だ明らかではなく、その解明は今後の課題として残されている。聞き取り調査によれば、昭和14（1939）年に仙太郎が45歳で死去した後は、長男仙之助がまだ幼かったため、昭和18（1943）年から娘婿であった平岡雅雄がその経営を引き継ぎ、戦後復興期を

⁽⁸⁾ 担ったことが確認された。途中、昭和27（1952）年から昭和36（1961）年には仙之助が社長を務めたが、昭和41（1966）年に39歳で死去した後、再び平岡雅雄が社長となった。

同社は昭和60（1985）年に廃業するまで、国内でも有数のレースの生産高を誇った。昭和29（1954）年、昭和34年（1959）の工業統計表によってその位置づけを確認すると（表1）、全国の中で埼玉県におけるレース生産の割合は40%以上を占め、いずれの年も第1位であったこ

表1 日本におけるレース生地生産量

都道府県	1954年		1959年	
	生産量 (平方ヤード)	割合 (%)	生産量 (平方メートル)	割合 (%)
栃木県	50,000	1.45		
群馬県	52,743	1.53	203,540	1.68
埼玉県	1,588,586	46.09	4,856,231	40.09
富山県			179,763	1.48
石川県			336,112	2.77
愛知県	115,340	3.35		
滋賀県			878,295	7.25
京都府	617,695	17.92	4,821,791	39.81
大阪府	745,831	21.64	836,544	6.91
兵庫県	232,699	6.75		
奈良県	40,910	1.19		
岡山県	2,720	0.08		
合計	3,446,524		12,112,276	

資料：「工場統計表」（1954年、1969年）。

注1）1954年の全国事業所数は21

注2）1ヤードは91.44センチメートル

とがわかる。昭和29年と昭和34年を比較すると、全生産量は約3倍に増加し、埼玉県でも3倍の増加をみた。

2. 社内報『むつみ』にみる従業員とその生活

(1) 従業員の出身地と特徴

このような平仙レース工場でのレース生産を支えたのは、近隣農山村から供給された豊富な労働力であった。表2は昭和26年11月20日現在の当社における従業員を出身地別に示したものである。同年の全従業員数は387人で、そのうち約84%は女性従業員であった。出身地別にその特徴をみると、東京などの遠方、所沢地域を除けば、本社工場の立地している入間市より西側の農山村地域出身の者が多く見られる。昭和33(1958)年の『むつみ』には「新女性群像 ルポルタージュ 平仙レース工場」と題する文章が掲載されており、従業員の特徴に言及している。工場で働いている女性従業員へインタビューした内容は次のようにまとめられている。

「皆さんの態度はきわめて明朗であった。やはりこの近所の農家の娘さんが多いようだ。それに兄弟の多い人が大部分で、(中略)、この工場で働いていたということが、将来嫁に行く時の“保証マーク”のような働きをするというのは、どうやら工場側の宣伝などではなく、本⁽⁹⁾当にそうらしい(下線部筆者付記)」。

また、昭和30(1955)年1月の『文化新聞』は中卒者の町工場(平仙レース、飯能繊維、飯能工機、中里織物工場)への就職希望率が非常に高くなっていることを報じている。⁽¹⁰⁾『むつみ』には毎号、「入社后感想」という項目が設けられており、そこでも平仙レース工場への就職希望者が非常に多かったことが記録されている。例えば昭和27(1952)年発行の『むつみ』3号には、入社試験を振り返って次のような感想が寄稿されている。「(前略)試験場はもう大勢の受験者で一ぱいでした。(中略)こんなに大勢の人が受験するのかなと思うと心細く(中略)、発表の日が待ち遠しく、また何となく恐ろしい様な気持でその日を待ちました。夜床につくと、あのきれいな工場で働いている自分

表2 平仙レース工場従業員(昭和26年)

出身地	男	女	計
飯能	9	38	47
元加治	19	41	60
加治	1	9	10
精明		11	11
南高麗		13	13
高麗		16	16
高麗川		5	5
原市場	4	11	15
吾野		17	17
東吾野		14	14
名栗	1	9	10
高萩	1	14	15
毛呂山		7	7
大家		2	2
越生		1	1
梅園		2	2
川角		1	1
入西		1	1
豊岡	10	16	26
金子		10	10
東金子		20	20
藤澤		5	5
三ヶ島	2		2
入間川	2	8	10
水富	3	12	15
柏原		4	4
奥富		1	1
大東		3	3
霞ヶ関		2	2
所沢	1	2	3
吾妻	1	6	7
山口		4	4
小手指		1	1
富岡		1	1
堀兼	1	1	2
川越	3	2	5
高階		1	1
比企		1	1
菅谷		1	1
大河	1		1
東		6	6
小木曾		4	4
成木		1	1
青梅		1	1
京	2		2
石神井	1		1
自由ヶ丘	1		1
日暮里	1		1
合計	63	324	387

資料：『むつみ』第2号(1951)、66頁より作成。

を想像したり、その反面考えまいとしても不合格でがっかりしている自分を想像したりしては、なかなかねつかれない夜も何度もありました⁽¹¹⁾、「私はどうしても第一希望であるあこがれの“平仙”に入りたかった。不安のうちに入社試験の日となった⁽¹²⁾」などとあり、平仙レース工場は当時の中学生にとって憧れの職場の一つであったことがわかる。

聞き取り調査によれば⁽¹³⁾、当時、中学校を卒業した女子の採用倍率は約5倍であり、高等学校の試験よりも難しいといわれたほどであった。従業員の年齢は女性の場合15歳から27歳くらいまでが中心であり、彼女たちは主に工場でレース生産に従事した。1台のレース機械に3人の女性従業員が配属され、男性は主に機械類の保守点検や総務に従事した。

(2) 従業員寮の生活

同社には図2にみるように女子従業員寮(睦美寮)が併設されていた。寮には自治会が組織され、寮生が運営の中心となっていた。会則によれば⁽¹⁴⁾、その目的は「明朗健全なる婦道の育成を図り、民主的にして堅実なる家庭的協同生活を営み、円滑なる工場運営に資する」ことであった。そのため3つの事業、すなわち①合理的な生活、②教養および体育向上、③保健衛生が重視され、それと対応するように睦美寮自治会は総務部、教養部、体育部、衛生部によって組織され、さらに貯蓄組合が設置されていた。これらは全て、寮生によって分担され、運営されていた。女性従業員はそれぞれ「月組」、「雪組」、「花組」に属し、寮および工場での日々を過ごした。

	昭和31年 (1956年)	昭和33年 (1958年)	昭和35年 (1960年)	昭和37年 (1962年)	昭和42年 (1967年)
本 社				女子高等学校	女子高等学校
		新工場・新寮	新工場・新寮	新工場・新寮	新工場・新寮
	準備・企画 刺繍機 36台 補修 カッティング・包装	準備・企画 刺繍機 44台 補修 カッティング・包装	準備・企画 刺繍機 44台	準備・企画 刺繍機 44台	準備・企画 刺繍機 44台
			イルマ工芸 補修 カッティング・包装	原市場工芸 刺繍機 2台	原市場工芸 原市場工場 4台 名栗工場 4台
				イルマ工芸 補修 カッティング・包装	越生工芸 越生工場 4台 東秩父工場 4台
姉 妹 会 社					イルマ工芸 仏子工場 補修・カッティング 毛呂山工場 カッティング

図2 平仙レース本社および姉妹会社の組織変遷
資料：「むつみ」別冊「伝統技術を継承する人たちの為に」(1968) 10～11頁より作成。

『むつみ』における「あるお部屋の日記から」という寄稿には、寮生活の様子が具体的に描かれている。一部抜粋して示したものが表3である。この日記から、朝四時三十分に起きて、夜八時三十分に消灯するまでの一日の中に、作業、勉強、余暇などが含まれていることがわかり、文章にはそれら一つひとつの中に楽しみを見つけながら生活している様子が生き生きと描かれている。このような寮生活は、彼女たちの多くがそれまで暮らしていた農山村の暮らしとは異なる経験が多く含まれていた。例えば、レースの機械についての記述、レースで作るウェディングドレスについて

表3 平仙レース工場における女子従業員の生活

事柄	日記内容
起床	四時半、夏の夜明けは早い、寮の窓は夜の去っていくのをつけています。素早く作業服に着替えて洗面所にさっとうする。歯をみがき、顔を洗う、ヘアーにブラシをあてながら、さあ、今日一日の仕事をバッチリやるんだ、と心にきめる。みんなと一緒に外へ出て工場へ向かう。うすもやにつつまれた工場や寮はまだ静かな眠りにつつまれている。今日がまた始まるのです。私たちの仕事今日の始めをつけるのです。
作業	上下七百本もの針がいちどに動きながら、そして、その一針一針を微妙に運びながら、夢のような模様を織っていく。機台について織っていると、このレースをどんな人が着るのだろう、などと思われてくる。その時その時の織られていくレースを見ながら、これは私と同じくらいの方が着ると似合うだろうなあ、とか、これはウェディングドレスにいいなあ、私が着たらどうかしら、ちょっと自分の姿にこのレースをだぶらしてみる。すると私の花嫁姿が見えるようだ…。(中略) 機台を歩きながら、自然と出てくる歌がある時には、やっぱり、仕事が順調に運びます。機械も生きもののように、織っている人の心が伝わるのでしょうか。私の気分の悪いときは、やはり調子がわるそう。ご機嫌のときはやはりご機嫌で動いてくれるようです。レース作り、これは女性の夢を託した、ロマンチックな仕事であるのかも知れない。けれども、やはり現実に戻ってみると、働く苦しみというものは誰にもある。その、苦しいこと、楽しいことを通して、一つの心のこめられた製品として、生まれてくるのだろう。
食事	午後一時三十分、終業のベルと共に食堂へ駆けこむ。昔は“今日の食事はなにかしら”と思う楽しみがあったが、近ごろは週末になると、翌週の献立が栄養士さんの方から発表になり、表になってお部屋にくばられるので、(中略) なんだかつまらない気持ちがないでもない。
清掃	毎日やるほかに、水曜日の一日は、特に念りにいたすのが清掃日です。お部屋をきれいにする人、窓ガラスをみがく人、庭のゴミはきをする人、お手洗いをぴかぴかにみがきあげる人、まあいろいろやるのです。
勉強	夏は暑い、午前の作業の後の勉強は、いささかこたえる。さらに食事の後ときているので、自分で一生懸命がまんはしてみるのだが、上のまぶたと下のまぶたが仲良くなってしまふ。(中略) 働きながら勉強するということは大変だ。でも、その大変さの中から、何か自分のものを自分なりにつかんでみようと思う。
余暇	四時五分。勉強が終わりました。教科書をかかえて、お部屋に帰るつもりが、ちょっと組合事務所へ立ち寄ることになりました。(中略) 組合事務所は私たちの小さな社交場です。この事業部には私たちの大好きな、お菓子や果物、化粧品に日用品、ラーメンに焼きそば、一応何でもそろっているのです。自分でおなべをかけ、中にラーメンを入れて、野菜があればそれを入れ、みるまに一丁出来上がります。(中略) “さあこれからお洗濯でもいたしましょうか”。
消灯	外灯の水銀が、淡く寮の芝生の庭をうかびあがらせる。窓辺に腰をおろしていると、近くを走る西武線の電車が高架にパチパチと火花をちらしながら仏子駅にすべりこんでいくのが見える。(中略) 夜のくらさの中に、私たちの寮の灯は明るく輝き、地下にあるお風呂場からのざわめきが聞こえる。(中略) 私たちの消灯は早い、八時三十分がおやすみの時間。(中略) 明日も早番、午前四時三十分にはおきなければならない。すでにお布団の中にはいって、おしゃべりをして人、どこのだれに送るのか、レターペーパーを広げている人。ナイトキャップをしながら鏡に向かって人など。それぞれが一日の最後の時間を楽しんでいる。(中略) おやすみなさい、ふるさとのおかあさん。

資料：『むつみ』15号、91～96頁により作成。

の想像にもその様子が窺われる。また、事務所で集まって食べるお菓子や果物、ラーメン、化粧品、レターペーパー、ナイトキャップなども彼女たちが新しく経験した新しいモノであった。

昭和27(1952)年に入社し、月組に所属していた女性(昭和12年生まれ)からの聞き取り調査⁽¹⁵⁾によると、養蚕農家であった実家(入間郡川角村)と比べて、平仙レース工場と寮での暮らしは驚くことばかりであった。例えば、実家では汲み取り式便所であったが、寮では水洗便所を使用することができた。12~15畳の部屋には先輩や後輩と10人くらいの共同生活であり、休日には同僚たちと山登りや映画、買い物に出掛けるなどして過ごした⁽¹⁶⁾。毎年4月1日には「桜祭り」が開催され、組ごとに宝塚の台本を取り寄せて芝居の発表会をしたり、寮に設置されているミシンを利用して自分たちで作った服でファッションショーを実施したりした。芝居のための衣装は、浅草から衣装屋が出向いて来ることもあった。

また、寮生活の中には教養講座というものが設けられていた。農山村で暮らしていた時には会えないような人たちが教養講座の講師として工場に来ることを、この女性は「中学校を卒業して働き始めた自分たちにとって、働きながら学ぶことには夢がある」と感じていた。教養講座の内容を具体的に示せば表4の通りである。講座の内容は文章にまとめられ、講義録として『むつみ』に掲載されている⁽¹⁷⁾。その内容をみると、結婚の目的の変化から恋愛が肯定されるようになったこと、男女が

表4 教養講座の内容

1960年	<ul style="list-style-type: none"> ・自信を持って生きましょう ・十七文字に作る楽しさ ・みんなで歌を歌いましょう ・これからの恋愛と結婚 ・宗教と文学
1961年	<ul style="list-style-type: none"> ・恋愛と結婚について ・民主主義について ・現代の親と子のありかた (働くということ、女性の一生今と昔)

資料:『むつみ』11号、第2号により作成。

対等な立場で共働きをするということ、農業から工業への転換を諸外国との比較で理解すること、女性が働きながら学ぶことによって自信をもつことなどが主要なテーマとして話されている。いずれの講演者も講座を受ける従業員たちが農山村出身者だということを意識しているためか、農山村の変化を事例としながらわかりやすく説明しようとしている点が注目される。この講座は工場側が主催して実施されているが、従業員が寮内で活動する教養部とも関係しながら、彼女たちが恋愛や結婚、職業、生き方に対する新しい価値観に触れる機会となっていた。

3. 平仙レース工場と近隣農山村の関係

このような新しい経験をした従業員たちは、自治組織やその活動を基盤として、退職した後も有志が集まって昭和31(1956)年に「むつみ会」を発足させた。会則によれば⁽¹⁸⁾、むつみ会の目的は「平仙レース株式会社の伝統である“むつみ”の精神を以て会員相互の親睦を図り、併せて会社の発展に寄与する」ことであった。昭和32(1957)年の会員数は108名であった。むつみ会会員からの寄稿には次のような文章がある。寄稿者は結婚を機に平仙レースを退職し、山間の農家の嫁として日々を過ごしながら工場での生活を回想している。

「私は毎朝四時に起きて御飯の支度にかかります。ずい分早くてなどと不平がましく思っても、希望に起き、歓喜に働き、感謝に眠ると、いつか私が工場に居りました時教えて頂いた座右の銘

が今更の如く懐かしく甦って参ります。農家の嫁と云うものは決して甘やかなものではありません。夏の炎天の作業など、灼きつく様な思いです。分苦しいと思っても、こんな時、私は何時も楽しかった工場生活のことを思い出して居ります。(中略)私にはこの楽しい思い出があるために、どんなに苦しい仕事にも耐え得られるのです。何事も誠実に平仙伝統の精神に感化された習慣は、知らず知らず家庭生活にも影響して大いに役立つ事も沢山あります⁽¹⁹⁾ (後略)」。

このように、工場生活の後、再び農山村の暮らしに戻る者も少なくなかったが、平仙レース工場での様々な経験が、精神や習慣としてその後の農山村の暮らしの中に生き続けていたことが読み取れる。むつみ会は彼女たちの精神的なつながりや拠り所としての意味を有していた。そして、むつみ会は単なる同窓会にとどまらず、その後、工場と周辺農山村に戻った元従業員たちを結びつける重要な役割を果たすこととなった。昭和35年の『むつみ』第11号には「イルマ工芸株式会社の設立について」という文章が掲載された。これは同社社長による文章である。以下にそれを引用する。

「むつみ会ができて、度々会合を重ねてゆくうちに、三、四年前頃であったでしょうか、当時会社の補修作業⁽²⁰⁾が大変立て混んでいる話から、それでは、むつみ会がお手伝いして上げましょうという事から出発して、其後各地の授産場等における技術指導も、むつみ会によって行われました。

こうした成果が次第に実って、むつみ会有志を主軸とする平仙サークルが各所にできてきました。そしてこの平仙サークルの仕事を円滑に進めてゆく機関として、平仙の傍系事業として設立されることになったのが、イルマ工芸株式会社であります。イルマ工芸は昨年十二月に設立して、皆様ご承知の通り、県道をへだてた平仙の向い側になっております。(中略)かようなわけで、イルマ工芸は、むつみ会を母体として発足した事業団体でありますから、常にむつみ会員とよく連絡がとれ、又むつみ会員の気持ちが直ちに反映される運営をしてゆく事が、仕事の大きな眼目の一つになっております⁽²¹⁾ (後略)」。

このように、むつみ会はその後の分工場設立時の一つの契機となり、内職や分工場における労働力や技術を提供するという役割を果たした。

また、平仙レース工場は家族懇談会を実施し、農山村に暮らす従業員の家族たちに工場での様子を知らせる機会を設けていた。『むつみ』によれば、昭和32年度の家族懇談会は「家族と会社の連絡を一そう親密にし、出来る限り明るく働き甲斐のある職場とする」ことを目的として、近在地区と遠方地区とに分けて、年2回開催された⁽²²⁾。家族懇談会は、平仙レース工場が、近隣農山村と密接な関係を維持しながら、安定的にかつ優秀な従業員を確保するための重要な意味を有していたと思われる。同工場は従業員を採用する際に長男であることを1つの条件としていた。それは従業員の定着率を高めるためであった。平仙レース工場は周辺農山村から労働力を得るにあたって、農山村における社会組織を考慮した上で展開し、農山村出身の従業員もまた、工場という新しい職場で新しい経験をしつつ、しかし、この時期において、その根底には農山村社会の特徴とその影響が未だ色濃く残っていた様子が窺える。

②……………平仙レース工場の周辺農山村への拡大とその影響

1. イルマ工芸社、原市場工芸社の設立とその意図

既述してきたように、入間工場におけるレース生産拡大の中で、昭和33(1958)年から同社は入間市の近隣農山村よりもさらに遠隔の周辺地域に分工場を相次いで設立した(図2, 図3)。

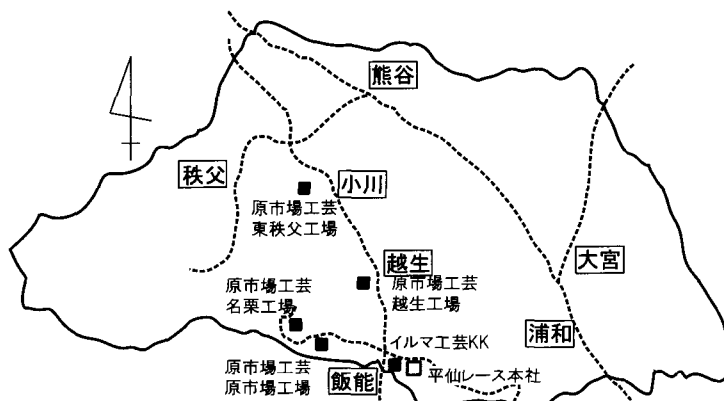


図3 平仙レース本社および姉妹工場の分布
資料:『むつみ』16号(1968)64頁より作成。

平仙レース工場の展開からみて、周辺農山村に分工場を設置した意図はどこにあったのだろうか。それは一般的に言われるように、単なる廉価な労働力の集約を目的としたものであったのだろうか。元従業員に対するこれまでの聞き取り調査、および『むつみ』の内容をふまえて、以下ではその点を再検討してみたい。

昭和43(1968)年の『むつみ』の別冊として、当時、同社社長であった平岡雅雄が従

業員に向けて『伝統技術を継承する人たちの為に』という冊子をまとめている。「企業の発展的変貌」と題した文章の中で、平岡は物事の変化には2種類あると述べている。すなわち、①昆虫のようにダイナミックな変貌を遂げ、もとの面影が残らない変化と、②人間の成長のように次第に変わりながらも、もとの面影を残しつつ進む変化との2種類である。その上で平岡は「現在高度成長下の此処彼処に見受けられる、団地の出現、高速道路、海岸の埋め立ての大工場群等は、昆虫的変貌の種類」であるとした。そして同社の発展的変貌は後者②の変化、つまり、もとの面影を残しつつ次第に変化していく人間的成長を目指してきたと述べている。

そのような企業理念の反映として、寮や教育機会の設置、従業員の出身地である農山村との関係があったことがわかる。しかし、それだけではなく、化繊や合繊が増加する時代の中であって、それらは本社で生産し、伝統技術による旧来からのレース生産を周辺に設置した分工場で実現するという意図もまた重要であった。平岡雅雄の言葉を以下に引用しよう。

「私たちの刺繍レース機は自動織機ではありますが、これを仕方書どおりに使えば、普通のレースしかできません。この自動織機を「のみ」「かんな」のように道具化して、科学を超えた使い方ができて、はじめて格調高いレースが生まれるのであります。

私たちはこの山合いの村々に「レース織の作法」とうい苗木一本ずつ、そっと植え込む作業に

取りかかりました。

これが（中略）飯能市在原市場、名栗村、毛呂山町、越生町、東秩父の工場であります。

私たちはこの「レース織の作法」を、技術の精神で育てたいと考えました。そのために、母体である本社と姉妹会社とは、支配・被支配の関係ではなく、仕事では結ばれていても技術の精神では競い合って、相互にバランスのとれた関係を維持すべきであるというたてまえで発足しております。

従って、この私たちの企業の展開は、一見類似に見える近頃流行の労働者を求めて工場を移駐するのとは、本質的にその思想を異にしています（傍線は筆者が付記）。

高度経済成長期の渦中においてその変化に意識的でありつつ、同社の展開を意味づけた点が興味深い文章である。では、工場側のこのような論理によって設置された分工場は周辺農山村のどのような状況の中に受け入れられ、また、それによって地域や人々の暮らしはどのような影響を受けたのだろうか。次節ではその点について、名栗村を事例に検討する。

2. 名栗村の変化と名栗工場の立地

名栗村には昭和 39（1964）年に、平仙レース工場の姉妹会社「原市場工芸」の分工場として名栗工場が設立された。当時の従業員数は原市場工場で 42 名（うち男性 35 名、女性 7 名）、名栗工場は 19 名（うち男性 17 名、女性 2 名）であった。その当時の様子を『むつみ』に掲載された原市場工芸社長の言葉が伝えている。

「平仙レース株式会社を母体として、昭和三十八年十一月、名栗川の上流、山紫水明の環境豊かな原市場の地に産声を上げた原市場工芸も、早一年有余を経てどうやらレース生産工場としての形態が出来上がりました。

私達は伝統ある平仙の傍系会社として今後原市場工芸が、この地区の人達に親しまれ、地元の若い人達の良き職場として成長するよう、レース技術の練磨育成、品質、生産の向上に努力致して居ります。

昨年八月、原市場工場も計画通り刺繍レース機四台の設備も完了し、九月中旬より全機操業に入り、十月より名栗村下名栗浅海戸の地に、名栗工場の建設に着工、十二月に一号機、本年一月に二号機の設備を終り、二月より操業に入りました。

幸にして当原市場、名栗地区は、平仙とは古くより縁故深き土地柄に加え、当社の従業員は全員直接、間接に関係深き方々に依り推選された優良な地区内の居住者にて、両工場共和やかな雰囲気の中にも、レース技術の習得、品質生産の向上に、各々が与えられた使命の自覚に燃えつつ、⁽²⁴⁾地元に直結した原市場工芸社風の養成に懸命の努力を傾注致して居ります（後略）。

以上のような分工場立地の意味を以下では農山村の変化と関連させながら考えてみたい。名栗村は、江戸時代から西川材の代表的産地として知られ、⁽²⁵⁾都市近郊に位置するその地理的条件から、全国的に見ても産業としての製炭や材木生産の展開がとりわけ大きな意味を持っていた。明治・大正

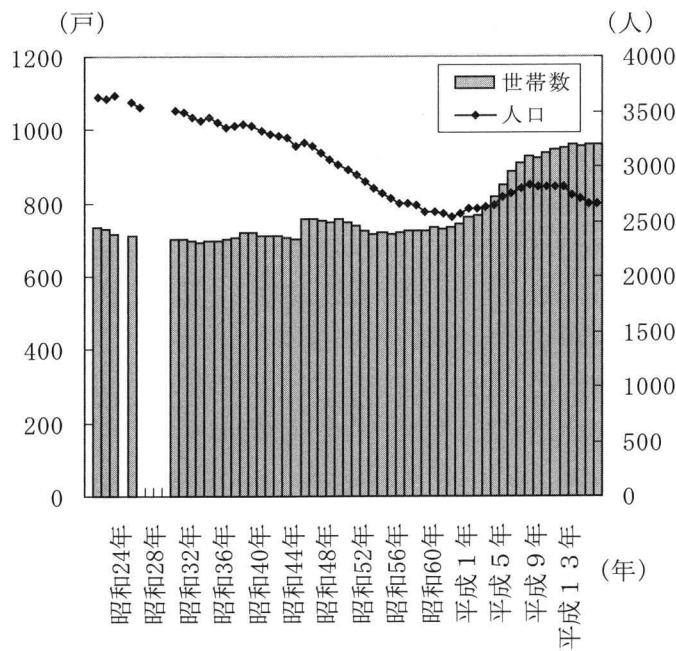


図4 名栗村における人口および戸数の推移

資料：昭和29年までは「名栗村勢要覧」より抽出。
昭和30年以降は名栗村役場住民課作成「住民係事務の
あらまし」より作成。
注) 空欄は記載がないもの。

期にこの地域に展開した林業、製糸業、織物業、製茶業、製材業などが発展すると、人口および戸数のいずれにも顕著な増加がみられた。⁽²⁶⁾中でも秩父絹産業発展の影響を受けて養蚕、紡織の業は比較的率の良い農間稼ぎであった。⁽²⁷⁾

このような名栗村の様子がさらに大きく変化するのは、第二次世界大戦後、特に高度経済成長期であった。図4には第二次世界大戦後から現在に至るまでの人口数と戸数の推移を示した。これを見ると、2つの点が注目される。第1点目は第二次世界大戦後、平成に至るまで世帯数はほぼ一定である一方で、人口数は漸次減少し続けている

ことである。減少傾向は昭和40年代後半以前やや緩慢であるが、それ以後は急速に減少した。第2点目は、平成に入って人口数、世帯数ともに微増したことである。これは都市部へ通勤可能な郊外住宅地としての開発が行われ、新住民が加わったことによる。⁽²⁸⁾しかし、その後の人口は減少し、名栗村は平成2(1990)年に過疎地域の指定を受けることとなった。⁽²⁹⁾

人口数の推移の背景には、産業構造の変化があった。この時期は、名栗村に限らず、日本各地の農山漁村において産業構造の大きな変化が見られた。名栗村の経済を支えてきた林業や農業、いわゆる第一次産業は戦後、とりわけ高度経済成長期を経て急速に衰退した。その点を産業構造の推移を示した図5によって検討してみたい。図5には昭和25(1950)年から平成12(2000)年まで、5年ごとの産業構造の推移を有業人口者数に占める産業別従事者数の割合を示した。名栗村においては林業が重要な産業であったことを考慮して、第一次産業の中でも林業の従事者数の推移を含めて示した。⁽³⁰⁾

図5をみてまず気がつくことは、昭和30(1955)年まで5割を占めていた第一次産業への従事者数が平成12(2000)年に至るまで減少を続けているということである。それに代わって増加するのは、第二次産業への従事者数であった。特に1965年以降の増加が急速であり、それによって名栗村の産業構造がこの時期に大きく転換したことがわかる。平成12年に至っては、第一次産業の従事者数は1割にも満たず、第二次産業および第三次産業への従事者がほとんどを占めるようになった。このような産業構造の変化は名栗村に限らず、この時期の多くの農山漁村で見られた現象であった。その中で、当該地域の特徴に言及すると、農業が減少し続けたことに比べて、林業への

従事者数が増加している点が注目される。この背景には、名栗村における戦後の木材景気を支えた林業従事者の存在があったものと思われる。また、第二次産業の内容としては、高度経済成長期において新たに村内に立地した各種製造工場が含まれている。昭和55（1980）年の農林業センサスには、「工場がある農業集落数」という調査項目が設けられている。農林業センサスにこのような項目が設けられた背景として、この時期において全国的にみても農業集落に立地する工場数が増加していた状況を窺い知ることができる。名栗村もその例外ではなく、村内に複数の工場が立地していた。名栗村のデータを確認すると、工場がある農業集落数は6集落であり、業種別工場数を見ると、繊維工業が1、化学工業が3、木材製造業が4立地していた⁽³¹⁾。名栗村における当該期の繊維工場とはすなわち、先述した平仙レース工場の関連工場であった。名栗工場はまさにこのような状況の中に立地し、それまで農林業に従事していた人々の新しい就業機会の1つとなった。

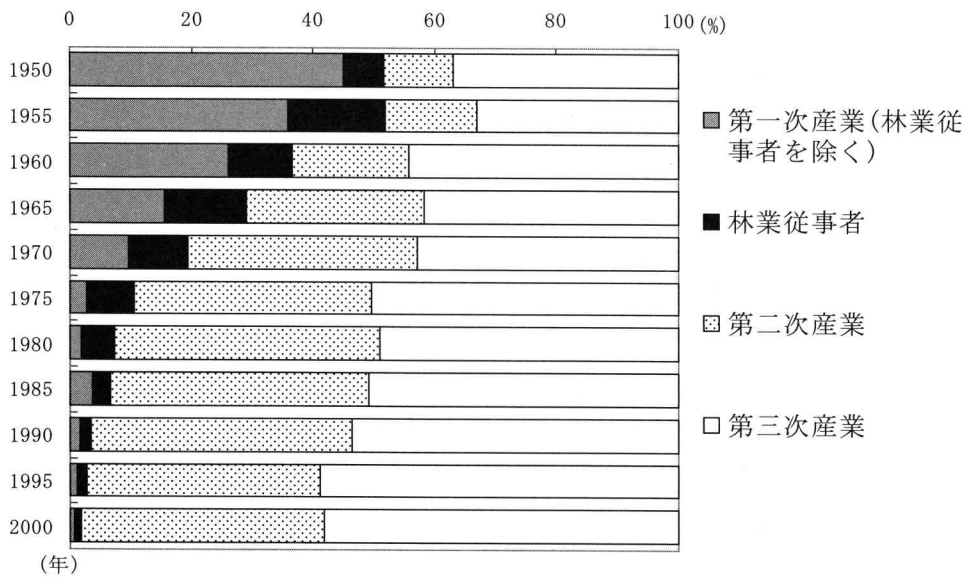


図5 名栗村における産業別就業人口割合の推移
資料：国勢調査データ、『埼玉県史』より作成。

③……………住民の就業履歴からみた高度経済成長期における農山村の変化—名栗村を事例として

1. 住民の就業履歴と暮らしの変化

名栗村では近代から現代にかけて、人口、産業ともにいくつかの変化の画期を経てきた。とりわけ高度経済成長期に生じた林業の衰退と製造業への転換、人口の流出による過疎化は、当該地域における構造的な変化であった。では、地域の人々はいったいどのようにその変化を経験したのだろうか。以下では、平仙レース工場の動向を視野にいれつつ、名栗村に暮らすA氏(男性)、B氏(男性)、C氏(女性)のライフストーリーおよび就業履歴に着目しながら住民の視点から山村の社会経済的

変化を考察する。

(1) 山仕事からレース工場への転換—A氏の就業履歴

A氏は昭和9(1934)年に名栗村に生まれ、第二次世界大戦の終戦を迎えた時には小学5年生であった。⁽³²⁾ 当時の名栗村は林業景気により活況を呈していた。A氏は当時の様子を次のように記憶している。林業従事者が生木を担いで山から下りてくると、飯能の材木商が待っていて、伐り出してきたばかりの材木が次々と飛ぶように売れた。それほど山仕事は好景気であった。植林が熱心に進められ、それは戦後の拡大造林へと繋がった。⁽³³⁾ 昭和28年の文化新聞には「山を伐りつくして仕事のない名栗」という記事が掲載されている。「年々乱伐の為に坊主山が増えていく現状」という言葉から、当時の木材景気を窺い知ることができる。⁽³⁴⁾

そのような状況の中で、A氏は新制中学校を卒業すると同時に木材の伐採、搬出など、山仕事に従事するようになった。84人いた同級生の中で高等学校に進学したのは僅か8名という時代であった。中学校を卒業して例えば商店などで「住み込み」で1カ月働くと500円程度の給料であったが、山仕事の場合、1日で150円の稼ぎになった。山仕事には季節によって繁忙期があるので、A氏は仕事が少ない時期には製材工場へ働きに行くこともあった。搬出作業はシラヤソリなど伝統的な運搬技術によっていたが、⁽³⁵⁾ 昭和20年代に架線による運搬技術が導入され、A氏もその変化に対応するため、昭和37(1952)年に運材架線技士免許を取得し、技術革新の中で新たな搬出作業に従事した。

しかし、昭和30年代後半になって、需要に追いつかない木材供給を補うために外材の輸入が始まると、次第に名栗村における木材の好景気は終焉を迎えた。A氏は昭和38(1963)年に山仕事をやめ、飯能にある材木商の運転手となり、約5年間勤めた。さらに昭和40年代に入ると、木材景気がますます悪化することを実感したこともあり、親戚の知人に誘われたことをきっかけに、昭和43年に材木商での運転手を辞め、当時、名栗村内で操業していた平仙レース工場の関連工場へ転職した。この工場は、布地に機械で刺繍加工を施す工場であった。A氏が工場に勤務し始めた当時、名栗工場には40人弱の従業員がおり、そのほとんどが名栗村の住民であった。男性と女性の割合は2:1ぐらいであり、女性の多くは既婚者であった。24時間機械を止めずに作業するため、一日2交代制で働くようになった。

A氏は8年間、工場で技術を習得した後、昭和51(1976)年に平仙レースから機械を借り受け、平仙レースの下請工場として独立した。自分と妻を主たる労働力とし、パート労働で村内の女性1名を雇用するいわゆる家族経営で約20年間工場を経営した。レース工場で働いた経験のある女性たちが近所に住んでいたため、刺繍の補修作業などは彼女たちへ内職を委託した。その間、昭和58(1983)年頃には平仙レースが廃業したため、機械を買取り、独立自営工場となった。

平成4(1992)年にA氏は、体調不良を理由に少しずつ工場経営を縮小し、平成8(1996)年にはレース工場を廃業した。その2年後の平成10年には森林組合の請負仕事で再び山仕事に従事するようになり現在に至っている。昭和20年代に従事していた山仕事とは内容的には異なり、平成21年現在は、間伐作業などを中心とした山林の整備作業に従事している。

(2) レース工場から電子部品工場への転換—B氏の就業履歴

B氏は昭和10(1935)年、名栗村に生まれた。B氏は中学を卒業してから昭和26(1951)年に平仙レース工場の本社に入社した。父は名栗村で林業に従事していたが、B氏は体が大きく山仕事には不向きであると言われたこともあり⁽³⁶⁾、最初から工場に勤めることを選んだ。B氏は前述のA氏のように名栗工場ではなく、従業員寮に入り、入間市の本社に勤めていた。最初は米俵を担げることを理由に従業員食堂に配属となり働いた。その後、18歳でボイラー技士の資格を取り、5年間は本社工場内のボイラーや機械の保守点検業務に従事した。その後、22歳から総務や労務、寮の管理業務に従事した。その経験を通してB氏は、平仙レース工場が従業員の福利厚生に多くの資金をかけていたことを実感していた。

昭和37(1962)年には同じ工場に勤めていた女性(後述のC氏)と結婚し、寮を出て名栗村に戻って同村から入間市へ通勤するようになった。しかし、昭和56年11月には平仙レース工場が解散したため、B氏は退社した。その後、平仙レース工場の分工場が電子部品工場などへ経営転換すると、B氏は同工場で働き、平成7(1995)年には60歳で定年を迎えた。

(3) 養蚕農家からレース工場へ—C氏の就業履歴

C氏は昭和12(1937)年に茂呂山町の養蚕農家に生まれ、中学校を卒業後、昭和27(1952)年に平仙レース工場に入社し、入間市の本社で働いた。C氏は寮生活を10年経験した後、昭和37年にB氏と結婚し、名栗村に移り住んだ。同年3月に退職するとC氏は平仙むつみ会に入会し、2010年現在でも同会に参加することがある。

C氏は『むつみ』に入社当時の気持ちやその後の生活を作文にして寄稿している⁽³⁷⁾。それを抜粋すると以下の通りである。

「入社試験に合格し、胸をわくわくさせながら待望の平仙レースの門をくぐって入社したのはあの春雨のぬらす4月1日でした。(中略)

かえりみれば4月1日、学校生活を終えて社会の一年生として出発した思い出深い日、駅まで送ってきてくれた朋友に別れをつけ、春雨の中を走る電車にゆられて父と一緒にこの工場に参りました。(中略)

さわやかにゆれる青葉若葉のみどりすがすがしいこの清潔な寮、明るい工場、そこで真実の姉妹のように敬愛しつつ生活出来ることは、私達働く者の大きな心の喜びであります。私達はこの良き寮、良き職場の中で、平仙の伝統をいつまでも保ち、やさしく強く生きていきたいと思えます。そして、この平仙を一層高め、レースの生産を少しでも多くする様日々努力を続けて行きたいと思っております(傍線は筆者が付記)。

上記の文章からは中学校を卒業したばかりのC氏が養蚕農家の実家を出て、新しい生活に踏み出した当時の気持ちが伝わってくる。このC氏は第1章で事例とした女性と同一人物であり、既述したように平仙レース工場の寮生活を通して、実家である養蚕農家の暮らしとの違いに大いに驚いたことを記憶している。

2. 住民の就業履歴に見る高度経済成長期と地域の変化

A氏、B氏、C氏の人生とライフヒストリーと就業履歴を通して見えてくるのは、第二次世界大戦後の農山村を生きた人々の人生には、地域における社会的、経済的な変化が深く刻み込まれているということである。とりわけ高度経済成長期以降の変化はそれまでの農山村での暮らしを根底から覆すような大きな変化であったようにみえる。このような人生、複雑な就業履歴のありようは、A氏、B氏、C氏に限ったことではなく、第二次世界大戦後の都市近郊農山村を生きた人々に共通する点であると考えられる。A氏は林業に従事した後に産業別分類で説明するならば、第一次産業から第二次産業へ、そして再び第一次産業へと従事しているのであるが、その内実は非常に複雑であった。この複雑さの背景には木材景気の水面下で進行した外材輸入の影響や、村への工場立地、その撤退による山村における雇用機会の喪失などがあり、A氏やB氏の就業履歴には、現在に至るまでの名栗村、より広く考えれば日本の農山村を取り巻く歴史的变化が色濃く反映されていた。

昭和28(1953)年の『文化新聞』には林業の好景気に沸く名栗村の様子が伝えられる一方で、同じ紙面の中に山仕事に従事する若者の中には集団で出稼ぎに行く状況が報告されている⁽³⁸⁾。この記事を見ると、山仕事が早く終わったために出稼ぎに行くという理由以外に、「山村の日雇いでは将来心配」と見切りをつけた若者が次第に村を離れる傾向がみられるという点が興味深い。出稼ぎ先としては箱根カ崎の瓦工場建設、静岡県の索道建設工事、長野県の深山に雑木伐採に行くことが報告されており、林業の好景気の水面下で、次第に高度経済成長期に生じ始めた様々な社会変化の一端を垣間見ることができる。このように、農林業地域に生きる人々がある時期から製造業工場の従業員となっていくという就業履歴は、A氏に限らず、当該地域の人々の多くが共有する経験であった。

3. 就業履歴にみる変化の諸相—断絶性と連続性

A氏は戦前期から山仕事に従事しつつ、製材工場へも勤務した。山仕事からレース工場への転職をする過程では、一時製材工場の運転手として勤務している時期があった。山仕事からレース工場従業員として転職したA氏は、さらに独立自営工場を経営し、その後再び山仕事へ従事して現在に至っている。一方、B氏は父親から山仕事を引き継ぐことをやめ、平仙レース工場で働き始めた。その後、会社の解散や事業転換の中で、様々な就業を経験した。仕事場における技術革新に対応するため、機械操作の資格を取得したことなどはA氏とB氏に共通する経験であった。

既述したように、平仙レース工場社長であった平岡雅雄は周辺農山村への分工場とその従業員の変化を「刺繍レース機をノミ、カンナのように道具化」と表現したが、実際にはその変化を従業員自身はどのように受け止めていたのだろうか。『むつみ』第16号には「特集 われらの仲間」という特集が掲載され、原市場、名栗、東秩父工場従業員の座談会記事などがまとめられている。ここには分工場に勤める従業員らの声が掲載されている。前述のA氏も座談会参加者の一人であった。その中から、以下では林業からレース工業への転換について述べられた言葉を引用する⁽³⁹⁾。

まず、レース工場に勤め始めた頃については、次のような内容が述べられている。「(もともとは)成木の材木屋に勤めていましたが、ここの話を聞きまして入ったわけです」、「まだ機械が来ないばかりではなく、建物もできあがっていない状態だったので、建築現場でのコンクリ運びや、草むし

りなんかやったり、土方みたいな仕事だったなあ。レースを織るっていったって、どんなことするんだか、さっぱりわかんなかったような気がしますね」。「最初に機械を見たのは、日曜日に本社にいったのがはじめてでした。そのときは“ずいぶんデッカイ機械だなあ”と思いましたね。そのあと、機械が入ってきて組立てられるにしたがって、おおよそのことがわかってきましたが、でも仕事はどんなことをやるんだかわからないし、だいぶあせりましたね」。「糸通しとかシャトル交換などは、わりと早くおぼえられましたねえ。まったく、じぶんなんか材木を相手にして働いてきた人間ですからねえ、はじめは、いったいどうなることかと思っていましたよ」。「なにしろ、なにもわからないのと夢中だったので、むずかしいとかなんとか考える暇もなかったです」。

山の仕事や材木屋に勤めていた頃との違いについては次のように述べられている。「山の仕事などは生活的に安定しないということではないでしょうか。たしかに現在は山仕事をする人がすくなくなりましたので受取り（この木をどれだけの値段で切ると契約すること）だとずいぶん稼ぐ人もいますが、雨が降れば駄目、ましては冬になって、雪でも降ろうものなら、何日も仕事ができないですから、いくら稼いでも平均するとたいしたことはないと思いますね。それと、なにしろ山の仕事はたいへんなんです」。名栗村の従業員の半分は村の消防団員であるため「消防の練習をする時などは、会社の都合の良い日に行われるような状態」であるということも話されている。

レース工場に勤めるということをどのように考えているかということについては「とてもむずかしい仕事ですが、楽しいですね。それに今までは農作業がすべてだったんですが、この仕事をするようになってから、単純と思っていた生活からいくらか解放されたような、そんな気がします」。「作業の仕方の基本は教えてもらいましたが、それに自分はどうやったら自分のやりやすい作業ができるのか、いつも研究しながらやっています」。

上記の言葉に見るように、A氏を含め当該地域の人々はその就業履歴の中で、山仕事からレース工場へという一見すると全く異なる業種へと転換し、その暮らしも人生も一様に大きく変化したように見える。しかし、彼らの経験をより詳細にみると、人々にとっての変化の諸相はそれほど単純ではないことがわかる。変化の過程には、明確に変化した部分（断絶性）と、変化しなかった部分（連続性）の両方を見出すことができる。彼らの言葉を借りてその断絶性を述べるならば、自然を相手とする不安定で不規則な山仕事から機械を相手とする安定的で規則的なレース工場勤務へ変わったことにより、賃金、生活サイクル、求められる技術が変化したことがあげられる。一方、連続性が見られる点としては、仕事に対する姿勢や意識、技術向上の努力などがあげられる。A氏は山仕事をやめてレース工場に勤め始めてから得た新たな技能に関わる知識をノートに記しながら、その修得に努めた。山仕事の道具からレース機械へ変わったとはいえ、技能を習得駆使するという点ではA氏の姿勢は一貫して変わらなかったことがむしろ重要であったように思われる。また、従事の仕方を調整してはいるものの、農業や消防団など地域のそれまでの暮らしを継続しつつ工場に勤めていた点もこの時期の特徴として注目される。このような人々の姿勢や生き方は、この地域の産業転換を根底で支える一つの重要な条件となっていた。このような変化の諸相、つまり変化の中にも断絶性と連続性が見出されることは聞き取り調査や『むつみ』の記述を通して明らかになった点である。

むすびにかえて

本稿では、都市近郊農山村における人々の暮らしと地域の変化を、住民の経験や就業履歴に対する聞き取り調査、当時の記録としての社内報『むつみ』を通して明らかにすることを目的とした。これまでの分析を通していえることは、人間織物生産地域およびその近隣・周辺地域において、平仙レース工場そのものが住民たちの高度経済成長期の経験と深く結びついているということであった。その経験とはすなわち、第一に機械を扱う工場勤務という経験である。これは近隣農山村から入社した女子従業員にとっても、分工場が立地した周辺農山村の人々にとっても共通する経験であった。第二にあげられるのは、寮生活を通して得た、新しい価値観の経験、新しいモノの経験である。農山村の暮らしとは全く異なる寮生活の中で、教養講座などを通じて新しい時代を実感した経験や、ミシンや水洗トイレ、レースとウェディングドレスに触れた経験は、中学を卒業後にレース工場に勤め始めた女子従業員の当時の記録や聞き取り調査の中でとりわけ鮮明であった。第三にあげられるのは、農林業から製造業への転換という経験である。これは特に、分工場が立地した周辺農山村に暮らす人々が経験したものであり、彼らの就業履歴は衰退する林業とそれを代替する製造業の登場という地域の産業構造の変化と密接に関わっていた。

本稿ではさらに、それらの経験の意味と地域の変化を、地域の人々の視点から検討するため、分工場が立地した名栗村に焦点をあてて、聞き取り調査によって住民の就業履歴を検討した。A氏、B氏、C氏はいずれもその就業履歴の中で平仙レース工場と関わりながら戦後を生きた。その関わり方は多様であったが、林業、農業、養蚕業からレース工業へという地域全体の産業転換を具体的な就業の変化として経験した点で共通していた。しかし、彼らの経験を子細にみると、人々にとっての変化の諸相はそれほど単純ではなかった。農林業から工場勤務へと変化したことで、就業形態、賃金、生活サイクル、求められる技術が明確に変化した一方で、仕事に対する姿勢や意識、技術向上の努力などは異業種への転換の中にありながらも連続的に持ち続けられており、その連続性によって平仙レース工場が支えられていたことも重要であった。また、むつみ会の設立の意味を検討すると、レース工業から農林業へ就業転換した場合にも、内職従事者あるいは分工場従業員として工場と関わり続け、工場での思い出を精神的な拠り所として持ち続けるなど、工場での経験がその後の近隣・周辺農山村に影響を与え続けたことも示唆された。つまり、従来の地域や暮らしが新しい地域や暮らしへと変化する過程は、断絶性と連続性の両側面を含みつつ、その両者が相互に影響し合いながら進行するものであったとみることができる。

村内に立地した工場として本稿で着目した平仙レース工場の理念とその展開、近隣・周辺農山村との関係はこの時代の典型というよりもむしろ、特殊な事例と位置付けられるのかもしれない。しかしながら、昭和4(1929)年から昭和60(1985)年まで、高度経済成長期という変化の時期を含めて同社がこの地域に存在していた影響は、A氏、B氏、C氏を含め、当該地域の人々の就業履歴と経験に明確に反映されていた。

このように、地域変化の内実は地域住民一人ひとりの人生と深く関わっているが故に、複雑な様相を呈し、とりわけ高度経済成長期における変化の様相は基幹産業や地域の違いによって特徴ある

展開をみせるものである。また、ドラステックな変化の内実を注意深く観察すると、前時代との断絶性ばかりでなく、連続的に移行してきた側面も少なからず見られることがわかった。変化を透過してその根底にみえる断続性と連続性を検討する際、本稿のように一人の人生の中に時代の変化を読み取ることに一定の限界があろう。より厳密な考察のためには、例えば複数世代にわたるライフストーリーや就業履歴の分析の中でその世代差に言及することなどが求められる。その点に留意しながらさらに事例を重ね、高度経済成長期と人々の暮らしの変化について考察を深めていくことを今後の課題としたい。

註

- (1)——藤永 豪1999「都市近郊山村における住民の就業変化と村落社会—佐賀県脊振村鳥羽院を事例として—」地域調査報告21, 39頁。
- (2)——就業履歴からみた地域変化については、例えば以下の研究がある。①江波戸 昭1976「一農村にみる就業構造の変貌—岡谷市駒沢1945～1974—」『東京大学東洋文化研究所紀要』70。②関戸明子2000「村落社会の空間構成と地域変容」大明堂。
- (3)——大門正克・安田常雄・天野正子2003『戦後経験を生きる』吉川弘文館。
- (4)——昭和26年(1951)第2号から昭和43年(1968)第16号までの残存を確認している。そのうち、第2号は入間市立博物館が所蔵し、第3号から16号までを町田廣作氏(名栗村)が所蔵している。
- (5)——ライフストーリーの分析とその意義について詳細は湯澤規子2009『在来産業と家族の地域史—ライフストーリーからみた小規模家族経営と結城紬生産—』古今書院を参照されたい。
- (6)——『むつみ』16号, 31～32頁。
- (7)——谷本雅之1998『日本における在来的経済発展と織物業』名古屋大学出版会282, 346頁。
- (8)——町田廣作氏(元平仙レース工場社員)からの聞き取りによる(2010年8月9日)。
- (9)——『むつみ』7号, 125頁。
- (10)——『文化新聞』は、当該地域の地方新聞であり、地域の状況を知る上で貴重な資料となる。本記事は1955年1月18日付けのものである。
- (11)——『むつみ』3号, 119頁。
- (12)——『むつみ』3号, 122頁。
- (13)——2010年8月9日聞き取り調査。
- (14)——『むつみ』3号, 103頁。
- (15)——2010年8月9日聞き取り調査。
- (16)——休日は電休日の木曜日であったが、昭和28年(1953)に工場が自家発電設備を備えてから日曜日が休日になった。
- (17)——『むつみ』11号, 12号参照。
- (18)——『むつみ』6号, 62～64頁。
- (19)——『むつみ』6号, 64～65頁。
- (20)——機械によるレース刺繍の不良部分を手作業で補修する作業。
- (21)——『むつみ』11号(1960), 113頁。
- (22)——『むつみ』6号(1957), 109頁。『むつみ』によれば、昭和32年度の家族懇談会は「家族と会社との連絡を—そう親密にし、出来る限り明るく働き甲斐のある職場とする」ことを目的として、近在地区と遠方地区とに分けて、2回開催されている。
- (23)——『むつみ』16号(1968)別冊『伝統技術を継承する人たちの為に』。
- (24)——『むつみ』13号(1965), 147～148頁。
- (25)——都丸九一ほか1983『関東の生業1農林業』明玄書房, 266頁。
- (26)——詳細は次の文献を参照されたい。飯能市名栗村史編集委員会編2010『名栗の歴史(下)』飯能市教育委員会。
- (27)——埼玉県入間郡名栗村教育委員会編1982『名栗村史』埼玉県入間郡名栗村教育委員会, 222頁。
- (28)——前掲26, 456頁。
- (29)——前掲26, 456頁。
- (30)——前掲26, 432頁。
- (31)——聞き取り調査によれば、名栗村内にはレース工場、洗剤工場、レコード針の製造工場などが立地していた。
- (32)——2009年9月6日聞き取り調査。
- (33)——昭和35年の林業センサスによれば、名栗村の植林面積118町のうち、人工林伐採跡地には67町、天然林伐採跡地には51町の植林がなされた。
- (34)——文化新聞1953年。
- (35)——詳しくは飯能市名栗村史編集委員会編2008『名栗の民俗(下)』飯能市教育委員会, 第二章を参照されたい。
- (36)——山仕事は体が軽く敏捷性ある方が怪我などの危険性が低くなるため、B氏は父親から山仕事を勧められなかった(2010年8月9日聞き取り調査)。
- (37)——『むつみ』3号(1954), 123頁。

(38)——『文化新聞』1953年。

(39)——『むつみ』16号(1968), 49～64頁。

本稿は2010年度・2011年度科学研究費補助金(若手研究(B))の交付を受けた研究課題「在来産業と小規模家族経営の構造と論理に関する歴史地理学的研究」(課題番号22720305)の成果の一部である。

(筑波大学大学院生命環境科学研究科, 国立歴史民俗博物館共同研究研究協力者)

(2010年11月29日受付, 2011年5月20日審査終了)

Experience of the High-Economic-Growth Period in Suburban Rural Villages : Through an Analysis of Residents' Employment Histories and the Hirasen Lace House Journal "Mutsumi"

YUZAWA Noriko

The Iruma region in Saitama Prefecture grew as one of the foremost cotton fabric production regions in Japan during the period from the end of Edo Period to the Meiji and Taisho Periods. The Family of Hiraoka Sentaro, a powerful textile manufacturing family in the Iruma fabric production region, focused attention on the lace industry at the end of Taisho Era and established the Hirasen Lace Factory in Bushi, Iruma City. The Hirasen Lace Factory became one of the foremost factories in Japan in terms of quantity of production, especially after World War II. Along with business expansion after 1960, branch factories were established in the surrounding rural villages. The plants continued operating until 1985. With the establishment of the Hirasen Lace Factory and its branch factories, quite a few people in the areas experienced a change from rural village life to factory-based life or company-based life.

The purpose of this article is to clarify these changes in people's lives and communities in suburban rural villages through interview about residents' experiences and employment histories and the house journal "Mutsumi" as a record of the times. The result is summarized as follows:

In the Iruma fabric production region and its neighboring or surrounding areas, the Hirasen Lace Factory itself was deeply connected with the residents' experiences in the high-economic-growth period. More specifically, the first experience was that they worked at plants with machines. This experience was common to women employees coming from neighboring rural villages and people in the surrounding rural villages where branch factories were located. The second experience was that they came to know new values and new things through their dormitory life. In dormitory life, which was completely different from rural life, they realized through general-education courses that a new era had come, and they used sewing machines and flush toilets and touched lace and wedding dresses. In the records of the time and through interviews with women employees who started working at the lace factories after graduating from junior high school, this experience is clearly conveyed. The third experience was the transformation from the agricultural and forestry industries to the manufacturing industry. This was especially experienced by people who lived in the surrounding rural villages where the branch factories were located, and their employment histories were closely related to the change in regional industrial structure in which the forestry industry was declining and the manufacturing

industry appeared as an alternative.

In this article, in order to further study the significance of these experiences and the regional changes from the viewpoint of the local people, with a focus on Nagurimura where a branch factory was located, the residents' employment history is studied through interview. Every person who was interviewed as a case example was concerned with the Hirasen Lace Factory in his/her employment history and experienced the whole regional industrial transformation from the forestry, agricultural, and sericultural industries to the lace manufacturing industry as a concrete change in employment. Looking at their experiences in detail, however, aspects of the change from the people's standpoint were not so simple. Their change from agricultural and forestry workers to factory workers resulted in clear changes in employment form, wages, life cycle, and required skills, while their attitude to and awareness of the tasks and efforts for improvement of skills were continuously maintained in the midst of the transformation to a different industry. The continuity supported the Hirasen Lace Factory. It means that the process of change of the conventional community and life to a new community and life was progressing while involving both the aspects of discontinuity and continuity, which influence each other.

Key words: suburban rural village, high-economic-growth period, employment history, forestry industry, lace industry